

乳児は他者の体験を我が事のように感じるか？

—他者の摂食場面における擬似酸味反応の検討—

香川大学 川田 学

Do infants feel the other's experience as if it's his/her own?

: Examining the “false acidity reaction” to the other’s feeding scene.

Kagawa University KAWATA, Manabu

本研究では、レモンを舐める経験をした乳児が、他者のレモン摂食場面を見て引き起こす反応を、「擬似酸味反応」として実験的に検討した。本実験には、健康な乳児（生後5ヶ月から14ヶ月）とその母親38名が参加した。実験において、実験者が実験群の乳児にレモンを舐めさせ、乳児の酸味反応が消失した直後及び15分後に、その乳児に実験者がレモンを舐めるシーンを見せた。主要な結果は以下のとおりである。実験群の乳児は、“顔をしかめる”および“口唇の動き”のカテゴリの頻度が、統制群より有意に多かった。この傾向は6ヶ月児においてすでにみられた。更に、“のけぞる”や“頭を掻く”などのユニークな行動も、実験群の乳児にのみ生じた。実験者は真顔（neutral face）であるため、乳児の反応はいわゆる共鳴動作とは異なり、何らかの仕方で他者の体験を先取的に感じ取り、自分自身の体験のように身体反応を惹起しているものと推察された。

【キーワード】 乳児, 擬似酸味反応, 他者理解, 共感性

The purpose of this study was to examine the “false acidity reaction” to the other’s feeding scene. Thirty-eight infants (5- to 14-month-old) and their mothers participated in this study. In the procedure, infant licked lemon, and then the experimenter showed the infant the scene which licks lemon. The major findings were as follows. The infants that licked lemon, showed significantly frequent in the category of “frowning” and “lip movement” than the infants of control group. This tendency was already seen in the 6-month-old. Moreover, unique behaviors, “scratching the head” and “bending backward” and so on, also occurred only in the infants that lemon licking. This phenomenon should be not mere imitation (early imitation). Because the experimenter showed the neutral face to the subjects. If the infants would imitate the adult’s facial gesture, the neutral face appeared on their face. Infants could simulate other’s experience unintentionally before reasoning it.

【Key Words】 Infant, False acidity reaction, Understanding others, Empathy

問題の所在

(1) g 男の謎

乳児の発達には、現代の科学水準をもってしても謎や奇跡としか呼ぶほかない現象があまた見られる。1960年代から長足の進歩をとげた乳児研究の中でも、とりわけ多くの研究者を惹きつけて止まない領域のひとつは、乳児の共鳴的な身体性を示唆する諸現象であろう。生後間もない乳児が、大人の言葉かけのリズムに対して四肢を同期させて動かす「インタラクショナル・シンクロニー」(エントレインメント; Condon&Sander, 1974, Kobayashi et al, 1992 等)、モデルの表情を“模倣”する共鳴動作(新生児模倣, 初期模倣; Meltzoff&Moore, 1977 等)などがその代表格である。近年では、チンパンジー (*Pan troglodytes*) 乳児にも共鳴動作が見られることが報告され (Myowa, 1996)、コミュニケーションに関わる身体性の比較認知科学的研究も進んでいる。

本研究で取り上げたい現象は、こうした“共振する赤ちゃんブーム”の隆盛の中で、その不思議さと重要性にも関わらず、どういふわけか発達心理学の表舞台にのぼっていないものである。故久保田正人氏による生後6ヶ月男児 g 男の次のような観察記録がある。

この子は大人がさし出した半割りのレモンに口をつけて大変すっぱそうな顔をした。その後5分くらいして大人がたわむれにレモンを、おいしいよと普通の顔で口にしてみせたとき、この子はまるで自分がまたそのレモンを食べたかのようにたまらなくすっぱそうにしたのである。(久保田正人 1994 「二歳半という年齢」新曜社 p48)

こうした現象は、日頃乳児と関わっている者ならさほど珍しいものではないように感じるかもしれない。しかし、これは実に不思議なことである。ふつう乳児は、自分が食物を食べる光景を鏡などを使って見るなどということは、少なくとも日常的にはない。よって、乳児にとって自分が食べる行為に及ぶ際の知覚像は、純粋に一人称的なものはずである。g 男のような離乳食の初期から中期の乳児であれば、食物はたいい養育者から供給されるものであり、乳児の体験としては養育者の表情や声を含めた諸々の身体動作を背景として食物が迫ってき、半ば非意図的に開口するといったものであろう。川田・塚田一城・川田 (2005) でも、生後5ヶ月~7ヶ月頃までは受動的摂食(養育者からの食物供給)を拒否する割合は限られている。乳児にとって、初期の食行為は概ね受動的な体験として成立していると考えられ、自身の食体験を客観的に知覚する水準ではないだろう。

一方、食物を食べようとする他者を見るときは、まさに食べる主体である他者の身体動作の一連が知覚されることになる。つまり、他者の食行為の知覚像は二人称的(ないし三人称的)なものといえる。このように、「自分が X を食べることを知覚すること」と「他者が X を食べることを知覚すること」はおおよそ異なる体験であるのだが、g 男はこの異なるレベルの経験を自分の身体の上で統合しているかのようである。g 男は、生後6ヶ月にして一人称的体験と二人称的体験をマッチングしている一平たく述べれば他者の経験を我が事のように感じている一ということだろう。

久保田氏のこの記録は、すでに 1981 年の段階で、当時の第一線の心理学者で編集された「講座・

現代の心理学（小学館）の第五巻「認識の形成」において写真付で発表されている。時代を鑑みれば、発達心理学者がこの現象をもっと取り上げて論じてよさそうなものだが、現実にはほとんど扱われてこなかったようである。むしろ、社会学（大澤，1991）や哲学（廣松，1996）の領域で、人間身体の特異性を示す現象として詳しく分析されている。しかし、この一事例をもって普遍的な現象として認定するのは尚早であろう。久保田氏の観察記録の普遍性は、未だに謎のままである。

(2) 擬似酸味反応

そこで、本研究ではこの“g 男の謎”の解き明かしに先鞭をつけようと思うが、今一度この現象の特徴について予備の考察をしておく。我々はしばしば、「他者が梅干を食べようとしているところを見るだけで、自分が酸っぱい顔になってしまう」というような経験をする。梅干の酸っぱさを経験しているがために、他者がこれから経験するであろうことを我が身に先取りしてしまうわけである。おそらく、梅干の酸っぱさを経験したことのない者の場合、注視反応は生じても「自分が酸っぱくなる」ということはないだろう。

これについて、大人の場合、常識的な理解では自分の経験を類推的に他者に当てはめて感情移入するということで説明できるかもしれない。しかし、g 男は6ヶ月という幼さで「自分が酸っぱく」なったのである。これはどのような能力によって説明されるのだろうか。類似した現象に、先述の共鳴動作があるが、これは目の前のモデルの表情や動作に直接接することによって自分自身も同じ表情や動作を生起する。これに対し、“g 男の謎”では、大人が酸っぱい顔をして見せたわけではなく、普通の顔をしてレモンを舐めるところを見ただけだと報告されている。つまり、g 男は他者の酸っぱい顔を見て、同じように酸っぱい顔をしたのではなく、他者がレモンを舐める光景を見ただけで、自分が酸っぱくなってしまったのである。よって、g 男の反応をいわゆる模倣の範疇に入れるにはいささか無理がある。かといって、感情移入と呼ぶには推論能力の未発達な月齢である。

本研究では、“g 男の謎”の核心に迫る議論まで及ぶことはできない。ここでの目的はまだ初歩の段階にある。g 男に施された状況と類似の条件を設定し、(1)本当に6ヶ月前後の乳児に自分が酸っぱくなってしまふ反応（以下、擬似酸味反応）が生じるかどうか、(2)より月齢の高い乳児にも実施することで反応の発達的变化を探ることを目的とした。

予備実験

方 法

協力者 香川県内に在住する生後9ヶ月から17ヶ月までの乳児5名。具体的な月齢は、9ヶ月が2名、14ヶ月が1名、15ヶ月が1名、17ヶ月が1名であり、男児1名（9ヶ月）と女児4名（9～17ヶ月）であった。協力者の募集は、高松市内にある子育て支援NPOの協力を得て行った。

実験実施期間 2006年6月。

実験実施場所 上記のNPOが管理する市内中心部の子育て広場の一室を借りて実験を行った。約30m²ほどの部屋の半分ほどを使用し、2畳程度のプレイマットの上に乳児が座るためのベビーラックを設

置した。

実験課題 実験課題は以下のとおりである。(1)と(2)は本研究のメインの実験課題であり、(3)と(4)は乳児のコミュニケーション発達の指標とするために実施した。

- (1) **直後条件**：乳児にレモンを舐めさせ、酸っぱい表情が出たことを確認し、それが消失した後に、実験者及び母親が乳児の気をひきながらレモンを舐めるところを見せる。このとき、大人は酸っぱい顔をせず、中立的な表情のまま舐める。
- (2) **遅延条件**：最初に乳児がレモンを舐めてから約 15 分後に、「直後条件」と同様の手続きで実験者及び母親がレモンを舐めるところを見せる。
- (3) **feeding 課題**：実験者が乳児におせんべいを渡し、しっかり持ったところを見計らって、「あーん」と口を開けてみせる。口に入れてくれないとき、再度「あーん」と言う。それでもくれないときには、乳児の持っているおせんべいを指で指して、「これちょうだい、あーん」と言い、口を開けて反応を待つ。
- (4) **giving 課題**：実験者が田中・ビネー式知能検査で用いるミニチュアのバナナを乳児に「どうぞ」と差し出し、少しして「ちょうだい」と言って手の平を上にして出す。乳児が受け取らないときは、手に持たせてから「ちょうだい」と言う。1回「ちょうだい」と言ってもくれないときには、再度「ちょうだい」と言いながら手を上下に動かす。それでもくれないときには、乳児のもっているバナナを指で指して「これちょうだい」と言い、反応を待つ。

実験の流れ 実験は以下の流れで行った。すなわち、(1)入室、(2)研究のインフォームド・コンセント、(3)5 分程度の自由遊び（ラポール形成）及び母親に協力者情報を記入してもらう、(4)乳児に 8 等分ほどに切ったレモンを舐めさせる、(5)直後条件、(6)自由遊び、feeding 課題、giving 課題、(7)遅延条件、である。実験終了後、母親にデブリーフィングを行い、子どもの発達状況に関する質問紙に記入してもらった。

結果と考察

(1) 乳児の反応について

A 児 (9 ヶ月, 男児)

直後条件では目立った反応は見られなかったものの、遅延条件では口唇部を活発に動かす反応が見られた。リーチングも多かったが、実験者がレモンを舐める様子をじっと凝視した。

B 児 (9 ヶ月, 女児)

酸っぱい反応は見られないが、A 児同様口唇部の動きの活発化がみられた。遅延課題の際、指さしが生じた。

C 児 (14 ヶ月, 女児)

リーチングが非常に多く見られた。B 児と同様に、実験者の口元を指さず動作が見られた。

D 児 (15 ヶ月, 女児)

人見知りが激しく、ほとんどレモンを舐めなかった。そのためか、目立った反応はなかった。

E児（17ヶ月、女兒）

自分がレモンを口にすると、ブルッと身震いするほど強く反応した。直後条件・遅延条件ともに、苦笑いのような反応が生じ、また身をよじりながら両手で後頭部を搔く反応が見られた。この他、口唇部の動きが活発になるなど、5名の乳児中最も顕示的に「自分が酸っぱくなっている」と推察される反応が見られた。

(2) 本実験への課題

予備実験では、ターゲットとする乳児よりも月齢が高めの5名を対象とした。g男で示されたほどの強い反応は見られなかったが、口唇部の動きの活発化、指さし、リーチング、苦笑い、身のよじり、頭部を搔くなど興味深い反応が観察された。

ここでは、直後条件・遅延条件とも実験者と母親の両方がレモンを舐めて見せる手続きをテストしたが、現実には手続きが煩雑・冗長になってしまう点がデメリットであった。また、統制群を立てていないため、上記の反応がレモンの摂食経験ゆえのものなのか否かは判断できない。従って、この点を検証するにはレモンの摂食経験のない条件（レモン経験なし条件）を統制群として用意する必要がある。

本 実 験

方 法

協力者 香川県内に在住する生後5ヶ月から14ヶ月までの乳児38名（男児20名、女兒18名）とその母親。募集は上述のNPOの協力を得て行った。対象児を6ヶ月群（5～7ヶ月児14名。平均6.1ヶ月。男児9名、女兒5名）、9ヶ月群（8～10ヶ月児14名。平均9.1ヶ月。男児6名、女兒8名）、12ヶ月群（11～14ヶ月児10名。平均12.0ヶ月。男児5名、女兒5名）の3群に分けた。

実験実施期間 2006年6月～7月（第Ⅰ期）、11月～12月（第Ⅱ期）。

実験実施場所 予備実験と同様の子育て広場の一室および香川大学内のプレイルーム。当初全実験を子育て広場にて実施する予定であったが、広場を管理するNPOの事情により第Ⅰ期（17名）のみ子育て広場で実施し、第Ⅱ期（21名）からは香川大学内に新たに設置したプレイルームにおいて実施した。

実験課題 直後条件および遅延条件においては、予備実験後の検討の結果実験者（女子学生）のみが実施することとし、以下の(1)(2)aおよびbの手続きとした。対象児のコミュニケーション発達の指標とする課題(3)(4)は予備実験と同様の手続きで行った。

- (1) **直後条件**:対象児にレモンを舐めさせ、酸っぱい表情が出たことを確認し、それが消失した後に、実験者が対象児の気をひきながらレモンを舐めるところを見せる。このとき実験者は酸っぱい顔をせず、中立的な表情（neutral face）のまま舐める。ただし、レモン経験なし群では乳児用ソフトせんべいを食べさせてから、口内に残留物がないことを確認後、実験者がレモンを舐めるところを見せる。

- (1) a 遅延条件 (レモン経験あり群用) : 最初に対象児がレモンを舐めてから約 15 分後に、「直後条件」と同様に中立的な表情のまま手続きで実験者がレモンを舐めるところを見せる。
- (2) b 遅延条件 (レモン経験なし群用) : 最初に対象児がレモンを舐めてから約 15 分後に、いかにも酸っぱいという表情 (sour face) をしながら実験者がレモンを舐めるところを見せる。
- (3) feeding 課題 : 予備実験と同様。
- (4) giving 課題 : 予備実験と同様。

実験の流れ 実験の流れは図 1 に示したとおりである。各月齢群ごとにレモン経験あり群 (Le 群) とレモン経験なし群 (N-Le 群) に分け、Le 群では対象児にレモンを舐めさせた後に直後条件を、N-Le 群では対象児にソフトせんべいを食べさせた後に直後条件を実施した。N-Le 群にソフトせんべいを食べさせるのは、他者の食の光景を知覚する際に、自身の食の経験が影響することを鑑み、直後条件前に自身が食物を口にするというレベルの条件を統制するためである。

直後条件と遅延条件を実施する際には、基本的に対象児をベビーラックに座らせ、実験者は対象児の正中線から 30 度程度右の方向よりレモンを舐めるところを見せた。母親には乳児に向かって左方向に 1m ほど離れたところに座ってもらった。移動運動や自己主張性の発達が顕著になる生後 10 ヶ月頃から、ベビーラックに座ることを極端に嫌悪する対象児がいたため、その場合は母親の片膝 (左) に斜めになるように座らせる対応をとった。母親の片膝に座らせたのは、対象児の反応として母親を見る行動等がベビーラックと同程度の生起可能性を保証するためである。

実験の所要時間は 15 分～20 分程度で、デジタルビデオカメラにて撮影を行った。

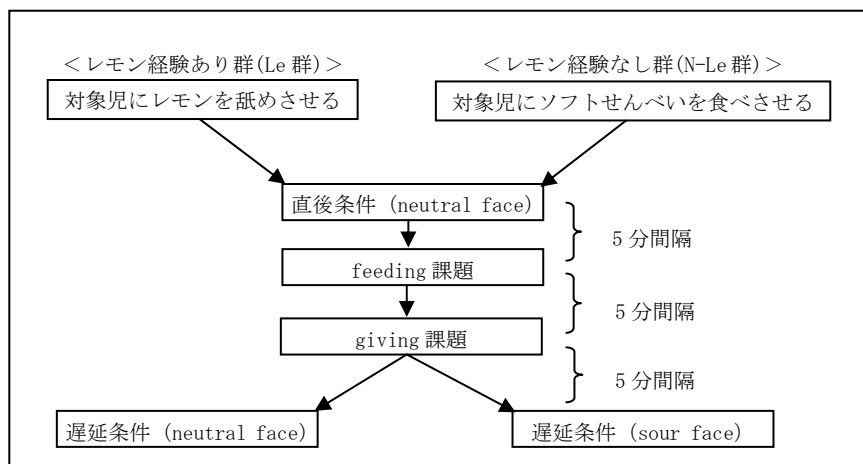


図 1 実験シナリオのフローチャート

分析対象時間 分析は、実験者が提示したレモンへの注視が開始してから乳児が完全に興味を失ったと見なされた時点までを対象とした。分析対象時間は表 1 に示したとおりである。

乳児は他者の体験をわが事のように感じるのか？

表 1 分析対象時間の平均（秒）と SD

	<u>6moLe</u> N=7	<u>6moN-Le</u> N=7	<u>9moLe</u> N=8	<u>9moN-Le</u> N=6	<u>12moLe</u> N=6	<u>12moN-Le</u> N=4
直後条件	12.29 (5.22)	18.43 (8.79)	16.75 (7.78)	16.00 (7.35)	16.17 (5.49)	10.25 (3.59)
遅延条件	16.43 (7.98)	23.57 (13.02)	19.38 (11.13)	18.17 (6.08)	19.50 (9.97)	14.75 (4.11)

コーディング 直後条件及び遅延条件の分析対象時間における対象児の反応を、表 2 に示したカテゴリによって 1/0 コーディングした。

表 2 カテゴリおよびその定義表

category	定義
交互注視	実験者の目と口元を交互に見る。目→口→目あるいは、口→目→口のパターンで視線が動いた場合にチェックする。
顔しかめ	眉間にしわを寄せたり、頬がひきつれるような反応をする。
口唇の動き	口唇が合わさって動く、舌を出し入れする、舌を鳴らす、唇を突き出すのいずれかが生起。
発声	声を出す。
手のばし	実験者の口元、レモンを持つ手、顔付近に向けて手を伸ばす。
口元接触	実験者の口元、レモンを持つ手、顔付近を触る。
微笑	実験者を見て微笑む。
のけぞり	のけぞったり、身をよじらせたりする。
頭を掻く	片手ないし両手で頭部を掻く。
母親参照	母親の方を見る。

結果と考察

(1) 6ヶ月児に擬似酸味反応は生じたか

6ヶ月児（5-7ヶ月）の乳児 14 名を半数ずつ Le 群と N-Le 群に分け、上記の流れで実験を行ったところ、直後条件において興味深い結果が得られた。ここでは、特に擬似酸味反応と関連が深いと思われる「顔しかめ」「口唇の動き」「のけぞり」の結果を表 3 にまとめた。

各群の対象児数が少ないので限定的な結果だが、実験者が中立的な表情でレモンを舐めたとき、眉間にしわが寄ったり、頬がひきつれるような「顔しかめ」は Le 群のみで見られた。また「のけぞり」は 1 名だけであったが、これも Le 群のみで見られた。「のけぞり」は 9ヶ月児の Le 群（直後）でも 2 名でみられたが、12ヶ月の Le 群（直後）及び N-Le 群（直後）ではいずれの月齢でも見られなかった。

表 3 6ヶ月児における擬似酸味反応の生起数（人数）

Category	レモン経験あり群 (Le)	レモン経験なし群 (N-Le)
	N=7	N=7
顔しかめ	3	0
口唇の動き	5	2
のけぞり	1	0

「顔を掻く」反応は6ヶ月では見られず、9ヶ月及び12ヶ月のLe群（直後）で各1名ずつ見られたが、これもN-Le群（直後）では全く見られなかった。ある児の母親が、子どもの傍らで実験者がレモンを舐める様子を見て、後で「自分の方が頭に血が上って痒くなってきました」と述べていたが、「顔を掻く」反応も擬似酸味反応として興味深いカテゴリである。

今回Le群に含まれた7名の6ヶ月児では、久保田（1981, 1993）で示されたg男のような明瞭な擬似酸味反応は観察されなかった。しかし、顔をしかめたり、のけぞったりといった、N-Le群には見られない特徴的な反応が生じたことは事実である。

(2) 直後条件におけるLe群とN-Le群の反応比較

次に、レモン経験の有無によって、乳児たちの反応にどのような違いが生じたかについて、月齢を合併した上で分析をすすめる。表4に示したように、両群には興味深い差異が生じた。

生起数の極端に少ない「のけぞり」と「顔を掻く」以外の8つのカテゴリについて、Fisherの直接確率検定を行った結果、「顔しかめ」(p<.05)と「口唇の動き」(p<.01)において有意差が、「口元接触」と「母親参照」において有意な傾向がみられた。

「顔しかめ」と「口唇の動き」は、通常我々が酸味の強い食物を食べた際に生じる反応である。レモン経験の有無によって、他者がレモンを舐める光景を知覚した際に当該2つの反応に有意差が出たことから、乳児に擬似酸味反応が生じるということはある程度検証できたものと思われる。

表 4 直後条件におけるLe群とN-Le群の反応比較

category	レモン経験有り群 (Le 群)	レモン経験無し群 (N-Le 群)	significance
	(N=21)	(N=17)	
交互注視	13 (61.90)	9 (52.94)	n. s.
顔しかめ	6 (28.57)	1 (5.88)	*
口唇の動き	14 (66.67)	3 (17.75)	**
発声	4 (19.05)	5 (29.41)	n. s.
手のばし	5 (23.81)	8 (47.06)	n. s.
口元接触	2 (9.52)	7 (41.18)	†
微笑	4 (19.95)	4 (23.53)	n. s.
母親参照	5 (23.81)	0 (0.00)	†

注1：表中の数字は、人数（%）。注2：n. s. 有意差なし，† p<.10, *p<.05, **p<.01

(3) Le 群における直後条件と遅延条件の反応比較

では、レモンを舐めた乳児は、15 分後の遅延条件ではどのような反応を見せたのだろうか。ここでは Le 群における直後条件と遅延条件の反応比較を検討する。

結果は表 5 に示したとおりである。直後条件と遅延条件の反応差を比較するため、McNemar の検定を行った。その結果、「発声」「手のばし」「口元接触」で有意差が見られた。「手のばし」や「口元接触」は、表 4 で見たように直後条件においては Le 群よりもむしろ N-Le 群にやや多く見られる傾向であった。ところが、Le 群の遅延条件では直後条件に比べて増える傾向にあり、「手のばし」の生起率は 23.8%（直後）から 81.0%（遅延）へ、「口元接触」では 9.5%（直後）から 52.4%（遅延）へと増加している。

「顔しかめ」や「口唇の動き」は若干減少しているものの、有意差は検出されていないため、15 分を経過しても引き続き Le 群において擬似酸味反応が生じると結論できるだろう。

表 5 Le 群における直後条件と遅延条件の反応比較 (N=21)

category	直後条件		遅延条件		significance
	あり	なし	あり	なし	
交互注視	13	8	13	8	n. s.
顔しかめ	6	15	3	18	n. s.
口唇の動き	14	7	11	10	n. s.
発声	4	17	10	11	*
手のばし	5	16	17	4	**
口元接触	2	19	11	10	**
微笑	4	17	9	12	n. s.
母親参照	5	16	3	18	n. s.

注 1：表中の数字は、人数。注 2：n. s. 有意差なし，* p < .05，** p < .01

総合考察

(1) 本研究の理論的示唆

本研究では、久保田（1981, 1993）による生後 6 ヶ月男児のエピソードから、これを擬似酸味反応とでも呼ぶべき大変重要な現象であると考え、実証的な検討を行ってきた。その結果、実験手続きや対象児数の問題など方法上の課題は残りつつも、非常に興味深い結果が得られたと考えられる。

まず、6 ヶ月児においてすでにレモンを舐める経験をしたか、しないかによって、他者がレモンを舐める光景を知覚した際の反応に差が見られた。ここから、他者が経験しようとしている、あるいは経験しているだろう内容を先取的に自分自身の経験のごとく感じてしまう傾向があることが推測される。Meltzoff らが示してきた共鳴動作は、モデルの表情や身振りなど顕在化された身体表現を直に知覚することで惹起される（ないし伝染 contagion する）ため、模倣の原初的形態と考えるのが妥当であろう。しかし、擬似酸味反応は、他者の顕在的な身体表現を模倣・伝染するわけではない。もし、模倣であるなら、乳児は中立的な表情をするはずである。なぜなら、モデルである実験者は「酸

っばい」顔はせずに中立的な表情をしているのであるから。本研究に参加した Le 群の乳児たちは、そのすべてに見られたわけではないが、実験者とは違う表情を見せた。それは、むしろ先にレモンを舐めたときに自分がした表情であった。つまり、「他者がレモンを舐めようとしている」ところを知覚することによって、乳児は再び「自分がレモンを舐めた」経験を呼び起こしているのである。そして、こうした傾向は、Le 群 21 名と N-Le 群 17 名を比較することによってより明確になった。

(2) 今後の課題

本研究の結果は、“g 男の謎”をめぐる問題を前に進めるものとなった。しかし、本研究の実験方法にはいくつかの問題点があることも事実である。よって、最後に今後の課題を述べておく。

第 1 に、非常に初歩的な問題として、重要な刺激であるレモンの形状を考慮する必要があるだろう。今回の実験では、乳児にとっての口にし易さを考え、レモンを比較的小さく切って（レモンをタテに切り、概ね 8 等分～12 等分）提示した。しかし、久保田（1981, 1993）では、半切りのレモンを使用している。レモンを小さく切ることで、特に低月齢の対象児には認識しにくい可能性もあるだろう。より視認性を高めるために、半切りのレモンを使用する方が妥当であろう。

第 2 に、刺激の等価性に問題があると考えられる。つまり、実験者がレモンを舐めるところを見せる際、子どもの月齢やそのときの様子・状態によって、提示の仕方が微妙に変化している可能性があるのである。従って、予めレモンを舐める様子を VTR 録画しておき、モニターを通して全対象児に同じ映像を見せた上での結果を検討する必要があるだろう。とはいえ、擬似酸味反応のような現象は日常の自然なコミュニケーションの中で、関わり手が子どもとリアルタイムでインタラクトすることによって生じる類のものであるともいえる。よって、本研究のような手続きの意義はいささかも下がることはないと考えられる。同じ現象に対して、様々なアプローチをとることによって現象理解が進むことはこれまでの発達研究が示してきたとおりである。

第 3 に、より本質的な問題として、乳児が何に対して酸味反応を生じているかを検証する必要がある。本稿では、これまで Le 群の乳児の反応が「他者がレモンを舐めようとするところ」を知覚することによってと云々してきた。しかし、状況からすれば「他者が～舐める」を無視することもまた可能である。つまり、乳児は「レモン」というモノに対してのみ反応しているかもしれないのである。過去に自分が舐めて酸っぱかった対象が現れたので、それを見ただけで酸っぱくなる・・・、これは古典的条件づけの原理で十分説明できる。これに対し、久保田氏が g 男のエピソードで示そうとしたのは、あくまで他者が舐めようとするのを見て、「他者の経験を我が事のように感じる」という心性についてであった。果たして、g 男が<人—行為—レモン>に反応したのか、それとも<レモン>のみに反応したのか、この点を区別することのできる実験シナリオの検討も重要な課題である。

文 献

- Condon,W.S.&Sander,L. 1974 Neonate movement is synchronized with adult speech :
Interactional participation and language acquisition. *Science*, 183, 99-101.
- 廣松渉 1996 役割存在論 (廣松渉著作集 第5巻) 東京:岩波書店
- 川田学・塚田・城みちる・川田暁子 2005 乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変
容:食事場面における生後5ヶ月から15ヶ月までの縦断研究. *発達心理学研究*, 16 (1), 46-58.
- Kobayashi,N.,Ishii,T.,&Watanabe,T. 1992 Quantitative evaluation of infant behavior and
mother-infant interaction : an overview of a Japanese interdisciplinary programme of research.
Early Development and Parenting, 1, 23-31.
- 久保田正人 1981 言語・認識の共有 藤永保・須賀哲夫・久保田正人・清水御代明・鹿取廣人 講
座 現代の心理学 5 認識の形成 (pp.177-256) 東京:小学館
- 久保田正人 1993 二歳半という年齢 東京:新曜社
- Meltzoff,A.N.,& Moore,M.K. 1977 Imitation of facial and manual gestures by human neonates.
Science, 198, 75-78.
- Myowa,M. 1996 Imitation of facial gestures by an infant chimpanzee. *Primates*, 37, 207-213.
- 大澤真幸 1990 身体の比較社会学 I 東京:勁草書房

